

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34513

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12959

研究課題名（和文）近代日本の住まいと自然に関する歴史社会学：昭和初期の健康住宅の実践から

研究課題名（英文）Historical Sociology on the Housing and Nature in Modern Japan: On Practices of Health House in the Early Showa Period

研究代表者

西川 純司 (NISHIKAWA, Junji)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60771136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、昭和初期の健康住宅を事例に、専門家や公的なアクター、居住者、モノという多様なアクターのせめぎ合いを史料やフィールドワークを通して調査し、そこから社会と自然の関係性について考察した。また、文献研究や海外の学会・研究会への参加を通して、統治性研究やアクターネットワーク理論に関する研究動向の把握に努めるとともに、そこで得られた知見を分析に反映させてきた。その成果は主に『窓の環境史：近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス』（青土社、2022年）を刊行することで広く公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、感染症が蔓延する社会において、住まいを介して人びとが公衆衛生上どのように自然と向き合い、それを活用し、その影響を受けていたのかを経験的に調査、分析したという点に認められる。また、近年の統治性研究やアクターネットワーク理論にもとづく欧米での議論を国内に紹介するとともに、こうした新たな視角から日本の事例を分析した先駆的な研究としても位置づけることができる。さらに、感染症や公衆衛生が社会における大きな課題となった現在、住まいにおける衛生や健康という主題を歴史的な観点から明らかにしたという、社会的な意義も有する。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the interaction among various actors - specialists, public actors, residents, and things - through historical documents and fieldwork, using the health house in the early Showa period as a case study, and we examined the relationship between society and nature. In addition, through literature research and participation in academic conferences and research meetings, we have tried to grasp research trends on governmentality studies and actor-network theory and have reflected the findings in our analysis. The results were widely published, mainly through the publication of the book, "Environmental History of Windows" (Seidosha, 2022).

研究分野：科学技術社会論

キーワード：住宅・住まい 医療 公衆衛生 環境 感染症 結核 アクターネットワーク理論 統治

1. 研究開始当初の背景

今日、持続可能な社会における住まいを考えることが地球規模での喫緊の課題となっている。とくに2000年以降、地球環境問題や原発事故などを受けて、環境負荷を抑えた省エネの環境共生住宅がますます必要とされてきている。冷暖房や人工照明に頼ることなく、建築のデザインを工夫することで太陽光や風、熱などの自然エネルギーを活用する「パッシブデザイン」は、その一例である（小玉 2008）。また、省エネ性能の高い住宅への建て替えやリフォームに対する助成制度など、行政や関連団体による後押しもみられる。今後も環境との共生に向けて国民、事業者、行政の協力が不可欠とされている（経済産業省 2012）。

しかし、社会と自然の「共生」の内実については十分に明らかではない。そもそも、社会と自然の関係性は普遍的なものではなく、それがおかれた社会的歴史的な文脈に依存している。したがって、環境共生住宅を導入すれば自然との「共生」が可能になるわけではなく、社会と自然の境界をめぐってせめぎ合う実践の産物として「共生」を捉えなければならない。いま必要なのは、住まいを介して人びとがどのように自然と向き合い、それを活用し、その影響を受けているのかについての経験的な研究である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、昭和初期の健康住宅をめぐる多様なアクターのせめぎ合いを経験的に明らかにすることである。そのために、事業者である建築家、行政等の公的なアクター、居住者に加えて、技術や住宅設備などのモノについてもアクターとして捉える。そのことで、それらがどのように健康住宅をかたちづくり、住まい、そして自然環境との相互作用を経験していたのかを分析、考察する。

3. 研究の方法

本研究は、史資料の調査および現地調査から、昭和初期の健康住宅をめぐる多様なアクターのせめぎ合いを経験的に明らかにする。多様なアクターとしては、建築家や医師などの専門家や、行政や各種団体などの公的アクター、居住者、モノを対象とする。史資料は、各種行政資料、専門書や学術誌、新聞記事のほか、現存する住宅などの建築物も含まれる。

分析および考察に際して、本研究は科学社会学の方法を取り入れることで、社会と自然の複雑な絡み合いに実証的にアプローチする。アクターネットワーク理論や実験室研究は、自然やモノをアクターと見なすことで「社会／自然」の二分法を回避し、それらの絡み合いを分析できる視角を提供してくれる（Latour 1987=1999, 2005）。この方法を取り入れることで、従来の住宅社会学では背景にとどまっていた自然環境を分析対象として取り込み、それが科学や政治、産業と不可分に結びついていたことを明らかにすることができる。

4. 研究成果

(1) 健康住宅

日本における健康住宅の試みは大正・昭和初期の藤井厚二や山田醇らを中心になされた。とりわけ、藤井は日本における環境工学のパイオニアとされていることから、主要な分析対象とした。

まず、健康住宅を設計するために必要な気候に関する知識は、戸田正三による研究や藤井自らによる観測や実験によって生み出されていた。たとえば、近年の「パッシブデザイン」がみられる背景にはコンピュータによる熱や空気の解析という科学的アプローチの発達があるが、藤井はそれらの解析のために自邸を実験住宅として建てて実験を積み重ねていた。こうした知識にもとづき、藤井は住宅の間取りや設備、建材に工夫を重ね、健康住宅を作りだしていた。

藤井による健康住宅の特徴として、具体的には、夏の高温多湿を調整できるように、室内においては「一屋一室方針」を採用している。部屋と部屋とのあいだを襖や障子によってゆるやかに仕切ることによって、夏にはこれらを開放して通風を自由にするなど、屋内を一つの部屋のように使用していた。換気を重視しているのは、温度や湿度だけでなく、衛生上の理由からでもあった。当時の主要な感染症である結核は飛沫によって感染することから、結核対策として換気が重視されていた。その他にも、夏の直射を遮るために軒の出を深くし、庇を設けることで、日照を制御する工夫もなされている。日本の和風住宅がもつ間取りや設備を、科学的な観点から評価し直した点は注目に値する。

また、衛生上の理由から当時の一般住宅にもサンルームが設置されたり、既存の縁側を簡易サンルームへと転用されたりしていたこと、そしてそれらを活用して結核療養や健康増進のための日光浴が行われていたことがみえてきた。ただし、一部の地域においては、こうした近代知に

もとづく新たな衛生実践が慣習的な価値観（風水など）とのあいだで摩擦を生んでいたことも確かめられた。

さらに、健康住宅の普及には藤井だけでなく、その周囲の専門家や技術者の影響が少なからず見られることがわかった。とりわけ、藤井は京都帝国大学の建築学教室で多くの人脈を形成していたほか、衛生学研究室（戸田正三）とも交流を持つなど、京都帝国大学を中心とした関西での人的ネットワークの存在が浮かび上がってきた。また、新聞社や各種団体による健康増進運動キャンペーンや住宅設計競技において、藤井をはじめこれら専門家たちが関わっており、健康住宅の普及を後押ししていたことも明らかになった。

このように、健康住宅が人や組織、技術、自然という多くのアクターが関わる集団的な科学活動によって成り立っていたことを確かめた。健康住宅や藤井厚二を扱う主に建築学でのこれまでの議論では、藤井個人の設計思想をみる傾向があるが、その社会的なネットワークについては十分な注意が向けられてこなかった。また、環境問題やエネルギー問題が広く認識される 2000 年以降、藤井による健康住宅は環境共生型住宅の先駆けとして再評価されているが、藤井の主眼はあくまでも居住者の健康に置かれていたことは強調しておく必要がある。

(2) 結核療養所（サナトリウム）での自然療法

健康住宅の居住者による採光や換気といった実践を解明するにあたって、結核治療や健康増進を目的に行われた同時代の医療活動を確認することが不可欠となる。そこで、戦前日本の結核療養所（サナトリウム）、とりわけ富士見高原療養所を対象にした史料調査および現地調査を実施し、分析を行った。

分析の結果、まず、戦前のサナトリウムでは自然療法（大気療法・安静療法・栄養療法）を中心に治療が組まれていたが、そのひとつに日光療法があった。この、太陽光線に含まれる紫外線の殺菌作用や人体への刺激作用を利用した療養は、遅くとも 1920 年代半ばまでには、日本においても病院や療養所で見られるようになることがわかった。

また、富士見高原療養所において、医師の正木不如丘が結核患者に対して行っていた日光療法の一部を明らかにした。ただし、日光療法の実地での実施は容易ではなかったことから、正木は日光療法を行うための最適な条件（日光浴場の配置や構造、設備、照射時間など）に注意を払っていたこともみえてきた。加えて、日光療法の科学的根拠を発見することができなかったがゆえに、正木は苦悩しながら日光療法を実践していたことも併せて確認できた。

(3) 分析枠組みの精緻化

分析枠組みの精緻化を目的として、とくに欧米において蓄積のある統治性研究の議論を整理するとともに、それらに対するアクターネットワーク理論や科学技術社会論の影響を検討した。その結果、フーコーの生権力の議論が人間の生にのみ関心を向けていたのに対して、近年の統治性研究は人間の生の問題を人工物や、動物などの他の生命、さらには岩石や気候などの非生命との関係のなかで問い直す方向へと、議論を展開していることが明らかになった。

こうした近年の欧米での議論は国内では十分に紹介されていない。そのため、本研究はこうした新たな視角から日本の事例を分析した先駆的な試みとして位置づけることができる。その成果は著書を出版するというかたちで広く公開している（『窓の環境史：近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス』青土社）。

これまでの住宅の社会学的研究は、象徴的にせよ構造的にせよ、住宅が社会的に構築されているという側面に目を向けてきたところに特徴がある。1990 年代以降、近代家族論は、住宅の間取りに近代家族の規範なかたちを読み取ってきた（上野 2002; 西川 2004; 久保田 2011）。また、住宅を規定するマクロ要因として、市場や政策などの社会構造論的な視点からの分析も見られる（Kemeny 1992=2014; 山本 2014）。さらに、住宅言説の分析から住宅の構築性を指摘するものもある（祐成 2008）。

これに対して統治性研究やアクターネットワーク理論にもとづく本研究は、住まいを社会の側に還元してしまうことなく、自然との関係から捉えようとしている。この点で、本研究は従来の住宅社会学を拡張し新たな方向性を探る試みとして位置づけることができる。また、こうした視角からの研究は「社会学は自然をどのように考えることができるか」という問題に、環境社会学とは異なったかたちで、答えようとするものとしても理解することができる。

(4) 感染症と公衆衛生の歴史

研究期間中、新型コロナウイルス感染症の流行という予想外の出来事に見舞われた。そのため、研究遂行にも大きな障害が出ることになったが、歴史研究である本研究が現在の社会的な要請に応えることも可能にした。

具体的には、コロナ禍およびコロナ後の住まいにおいて衛生がもつ意味合いは大きなものになったが、本研究を通して健康や衛生という主題が戦前日本の住まいをめぐる議論においてすでに大きな争点となっていたことを提示している。こうした知見は、コロナ禍およびコロナ後の住まいのあり方を歴史的な視座から位置づけ直すことを可能にするものとして理解できる。

また、本研究の成果は、社会と自然の「共生」が、必ずしも現在のような地球環境問題やエネルギー問題に限られるものではなく、感染症や公衆衛生という観点からも捉えることができる

ことを示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西川純司	4. 巻 109
2. 論文標題 コロナは住まいを変えるのか：歴史から問う	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 すまいるん	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西川純司	4. 巻 48(10)
2. 論文標題 感染症とともに変わる住まいのかたち：気候を統治する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 186-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西川純司	4. 巻 64(2)
2. 論文標題 アクターネットワークとしての住宅：昭和初期における健康住宅の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西川純司	4. 巻 1
2. 論文標題 戦前日本のサナトリウムにおける日光療法：正木不如丘の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14946/00002174	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西川純司
2. 発表標題 自然と共にある生：近代日本の公衆衛生史を書き換える
3. 学会等名 ミニシンポジウム「シン公衆衛生？人間の健康増進を超えて」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西川純司
2. 発表標題 報告『窓の環境史：近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス』
3. 学会等名 関西若手社会学研究会第28回研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西川純司
2. 発表標題 社会学から読みとく窓の環境史
3. 学会等名 シラス建築系勝手メディアver.3.0（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西川純司
2. 発表標題 統治性研究におけるアクターネットワーク理論の影響：近年の研究動向から
3. 学会等名 日本社会学会第93回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西川純司
2. 発表標題 フーコーにおける物質性：その現代的意義
3. 学会等名 日本社会学会第91回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西川純司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 321
3. 書名 窓の環境史：近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------